

1) チョウセンニンジン＝朝鮮人参

チョウセンニンジン(オタネニンジン)はウコギ科の多年草で、朝鮮半島、中国東北部、沿海州沿岸地帯などに分布する。かつてはもう少し広い範囲に分布していたものと思われるが、薬用としての価値が極めて高かったために、多くの地方で採り尽くされ、山西省などではほとんど絶滅してしまった。高さは約 60cm ほどで、茎は毎年 1 本だけが直立して生じ、その頂に数枚の葉が輪生する。葉は葉柄が長く、5~7 枚の小葉に別れ、掌状複葉となる。小葉の大きさは長さ 5~15cm で、先が尖り縁には細かい鋸歯がある。夏、茎頂から 1 本の花茎を出して、その先端に淡黄緑色をした小花を散形花序につけ、秋には鮮紅色の美しい果実となる。果実は扁球形の核果で、径 5~9mm、内部には半球形の核が 2 個はいつている。和名の由来は朝鮮で多く栽培され、根の形が人の形に似るところから人参になったとも、呉音読みによるものともいわれている。野菜の人参は 16 世紀末に中国から伝来したが、その形が朝鮮人参に似ていたために転用され、人参の名はもっぱら野菜の人参を指すようになってしまった。従って野菜の人参の呼称は、中国では人参ではなく『胡蘿蔔』である。朝鮮人参の別称としては、『高麗人参』とか『御種人参』(オタネニンジン)、『薬用人参』、あるいは単に『人参』ともいう。学名は『*Panax schin seng*』で、全てという意味の「pan」と治癒するという意味の「akos」の合成語で、種小辞は人参の中国音である。イギリスでの呼称は『Asiatic ginseng』、または単に『ginseng』ともいう。

朝鮮人参は中国では紀元前から重要な薬として利用され、不老長寿、万病の治療薬として、最高の地位を占めてきた。我が国へは 6~7 世紀に朝鮮を経由して伝来し、天平 11 年(739 年)に渤海からの使が、日本の朝廷に献じたことが記録に残されている。生の根を『水参』(スイジン)、水洗いしてから鬚根や外皮をのぞいて乾燥させたものを『白参』(ハクジン)、いったん蒸してから乾燥させたものを『紅参』(コウジン)といった。漢方では胃の衰弱による新陳代謝の衰退、糖尿病から生ずる口内の渇き、神経衰弱などの治療に用いられ、日本では民間薬として、火傷、粘液の炎症、出血などにも利用された。中国では根のみならず、花も葉も捨てずに利用するほど高価で、特に野性のものは高貴薬とされたために、人工的な栽培が行なわれるようになった。江戸時代になると日本でも人口栽培の研究が行なわれ、平賀源内の師であった本草学者田村藍水の努力により、世界でも最も早く 1730 年代には成功をおさめている。幕府は朝鮮人参をその管理下に置き、各藩に種子を分与するかたちで栽培させたが、これが「御種人参」といわれた背景である。現在では長野県、福島県、島根県などが主産地で、中国では遼寧省、吉林省、朝鮮半島では京畿道、黄海北道、錦山、扶与、江華島、豊基などである。

朝鮮人参の市場価値は根の形による。主根が長く指の太さほどの根が数本あるものが良質とされ、特に人間の形に近いものほど薬効に優れているといわれている。



チョウセンニンジンの花。江戸時代には種子は幕府によって厳しく管理されていた。このために『御種人参』とも呼ばれた。(東京都小平市薬用植物園)



チョウセンニンジンの果実(東京都小平市薬用植物園)。



この瓶は高さ7cmだったが桐箱に収められていた。それほど高価なものなのだろう。 [目次に戻る](#)